
MAIN TITLE

SRX

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MAIN TITLE

【コード】

N9004X

【作者名】

SRX

【あらすじ】

ある所にいる。男子が恋をしたり戦ったりするお話です。色々なことをやりますので、よろしく願います。

始まりの歌 1 (前書き)

今回は学園の恋愛系のお話です。

始まりの歌 1

俺は高校一年。

普通の高1の子供だ。

普通の成績だし、運動神経はあまりない。

恋愛だつてする。

だけど、変わっている部分が一つだけある。

それはちよつと痛い人だということ。

つまり中二病みたいなもの。

そう、ちよつと痛いだけ、ちよつと…。

まあ、話を進めましょう。

さて次は…。

「森崎！」

「……はい？」

「なに寝てんだこの野郎……！」

そうか…。

今は数学の授業だったか…。

「なに言ってるんですか」。先生の授業を寝るなんて滅相もござい

ませんよ。」

「そうか」。

「はっはっはっはっはっはっはっ。」

「はっはっはっはっはっはっはっ。」

「よし！森崎よ！今すぐ宿題の問題全部答えろおおお！」

「やってませえん！」

「バカやるおおお！」

バキッ！

「へぶちっ！」

顔の右側にストレート。

これは痛い。

やられた人にだけ分かる先生のストレート。

「ぶったね！」

バキッ！

「へぶちっ！」

二発目。

「二度もぶったね。親父にも」

バキッ！

「へぶちっ！」

名台詞を言わせんと三発目。

「三度もブチやがってあの教師…！」

「お前が悪いんだろ。全く数学の時間は寝たら殺されるって忘れてたのかよ。」

こいつは遠藤。

まあ、簡単に言つと俺とよく話す奴だな。

「眠いもんは眠いんだ。」

「お前：いつかボコボコにされっぞ。」

「俺の体は丈夫なんだよ。」

「あの教師の鉄拳をお前何回も食らっついてきてるから…まあ、生命
力はあるな。」

「ふっ、まさしく私は選ばれたにんげ
バキッ！

「へぶちっ！」

今度は遠藤に殴られる始末。

「もう時間か、じゃあな森崎。」

何事もなかったかのように去って行く遠藤。

「ふざけんなああああ！！！！！」

次々とみんな教室から出る。

「じゃあね〜。」

.....

「おおおう。青春だな森崎。」

何故か遠藤が。

「お前帰ったんじゃないのかよ。」

「話をそらすな森崎：お前紗江ちゃんの事好きなんだろ。」

桜 紗江。

おとなしい少女というイメージにバツチリはまっている女子だ。

「ちげえよ……。」

「おいおい、長い付き合いだから分かるもんなんだよ。」

「違うもんは違うんだよ！」

「まあまあ、そう怒るなつて。」

こつという時の遠藤は苦手だ。

早く逃げるか。

「じゃあ、俺は帰るな。」

平静を装って言う。

「屋上か……。」

遠藤が察した様に言った。

「お前は不利な状態になると絶対屋上行くからな。」

なんちゆうやつだ。

確かに俺の行こうとした所もあってるし、その目的もほぼあっている。

「まあ、じゃあな。」

遠藤が手をふった。

俺も平静を装って手をふった。

俺はゆっくりと屋上へ続く階段をあがっていた。

「なんだよ、あいつ…。」

遠藤が言ってる事は百発百中。

確かに俺は紗江の事が好きだ。

入学式の後、とりあえず絶対行くと思われる屋上を見て帰ろうとして、屋上の扉をゆっくりと開けて、顔を出して周りを見てみたら、そこに彼女がいた。

住宅街の方を向いていた彼女の後ろ姿が、桜がまっていたせいかもしれないが、とても可愛かった。

まさしく一目惚れと言ってもいいくらいな物だ。

俺はその後、ゆっくりと扉を閉めて全速力で帰った。

最後に彼女がこちらを振り向いた様に見えたけれども、俺は気にしなかった。

いや、自分の心がぐちゃぐちゃしてそれどころじゃなかったんだろ
うな。

こんな感じで、俺は彼女の事が好きになった。

そして、いつもあの日のように屋上の扉を開けた。

今日も同じように扉をゆっくりと開けた。

だけど、途中でその扉を開くのをやめた。

いや、本能的に止まってしまったと言った方がいいかもしれない。

屋上から声が聞こえていた、

「なあ、お前金あるんだろ。出せよ。」

「いや…です。」

という声が…。

だけどその声は男と男の声ではなく、いやと言った言葉が明らかに
女の子の声だった…。

始まりの歌 1 (後書き)

初めてですが、頑張りました。面白かったら幸いです。

「君の家さあ、お金あるんでしょう？だからさあ、別にちよつとぐらいいいんじゃないの？ねえ。」

「私…お金…持って…ません。」

「嘘言つてんじゃないよ！」

金を欲しがっている男が怒って壁を叩き鈍い音が響く。

おいおい一体どこの奴だよ女の子から金とろうとか考える奴は。

普通は大人しそうな男からこういう事やるだろつ。

音を立てずに扉を開けて、その光景を見てみた。

男はよく見えた。

不良。まさしく不良。絶対不良。それ以外の言葉がないくらい不良。

女の子は男に隠れていて見えなかった。

女みたいな男ではなく、正真正銘の女の子だった。

というよりか、この状況まずくないか。

どうする？先生を呼ぶか？

「こんな事はしたくないけど、痛い思いをさせなくちゃいけなくなりそうだな。」

「本当に…持って…ないんです。」

女の子は泣きそうだ。

どうする？先生を呼びに行くにも時間がかかりすぎる。

女の子がその間に何をされるか分からないぞ。

どうするか…。

男はなんかメリケンサックをつけてる予感がするんだよなあ。

いたそうだなあ…。

.....

答えは決まったようなものか畜生！

「さて、これが最後のチャンスになると思うよ。金を早くだせ！」

「本当に………ないんです。」

「じゃあ、どうなるか分かってるよねえ!!!」
男が手を振り上げた。

その時、女の子の目から一滴の涙がおちた。

その涙がおちたとき、自分の中で何かが切れた。

そして、俺は思いつきりドアを殴っていた。

しかしそれは、ドアが開いた事、俺が気づかれた事、俺の右手が痛みをおびた事しか残さなかった。

少しの間があった。

「てめえ、いまの話聞いてやがったなあ!」

不良が叫ぶ。

「お前：女の子泣かして楽しいのか？女の子から金とってプライドつてもんはないのか？」

「は？お前はなにいつてんだ？まあ、いい。いまの話を聞いていたらしいからなあ！ここから無事に帰れると思うなよお!」

男がこちらに走って向かってくる。

相手はメリケンサック、俺は素手。

でも気のせいかな負ける気がしない。いや、負けちゃいけないんだ。

女の子を泣かせて何も思わない奴を俺は許しちゃいけない。

だからこそ、奴を………ぶん殴る!!!

「うおおおおお!」

殴る！殴る！ぶん殴る!!!

バキッ!

「ぐはっ!」

俺の右手が相手に届く前に俺の腹に痛みがはしる。

俺は倒れそうだったが、たちひざままでとどまった。

「おいおい、さっきの勢いはどこにいったんだよ。俺はボクサーの子供だからな、少しは鍛えられてんだよ。」

くそっ！なにくらってんだよ！相手が強かろうと俺は勝つんだ！勝たなきゃいけないんだ！たて！たてよ！くそっ！

どっつ！

また腹に痛みがはしる。

どっつ！

何度も腹に痛みがはしる。

くそっ！くそおおおお！

どれくらい殴られただろうか、もう数えられないほど殴られたか、それとも意識がヤバイか、それともどちらもか。

もうダメか…。かつこ悪いな俺は。威勢がいいだけのただの弱者かあ…。そういえば、女の子はどこにいったんだろうか。

まあ、いいか。こんな姿を見られるなら逃げてもらった方がいいよなあ……………。

まあ、死ぬわけじゃないからな。

痛みも感じなくなってきたなあ。感覚も狂ってきたのかあ。ひでえな俺は。

もう、倒れそうだ…。

……………。

おかしいな。殴られてる音がしない。

……………。

目を大きく見開いてみるか…。

目をきちんと開いた瞬間、そこには不良が横たわっていた。

その隣に立っている強面の奴がいた。

誰だ？目が霞んでよく見えない。

「…さき！も…き！」

誰の声だ？よく聞き取れない。

「この！根性なしがああああああ！」

バキッ！！！！

いままでで一番の音と痛みが顔にあふれた。

分かった。分かったぞ。あの先生、絶対にぶちこころしてやるっ！！
これを最後に俺は意識を失った。

始まりの歌 2 (後書き)

なんか凄くよみづらい物になってしまいました。すいません。ダメ
なところはいつてください頑張ってなおしてみます。

出会い

気がつくところには川があった。

「ここは……どこだ？」

目の前には川、そして薄暗い。

「そうか……俺は死んだのか……なんで死んだつんだっけ？」

……。

まあ、いいか。とりあえず前にすすもつ。

俺が一步踏み出そうとしたその時、後ろから声が聞こえた。

「も……さき。」

何だ？まあ、確かめに行くか。

そして、俺はゆっくりと声のするほうへ歩いていった。

「森……き。」

何だ？森と木がどうしたんだ？

「起き……。もりさ……。」

だんだんとその声はよく聞こえてくる。

「起きませんね……。先生、一発殴れば起きるんじゃないですか？しかも、本気で。」

「よしっ！そうだな遠藤、そうしよう！行くぞっ！ぬおらああああ！死ねええええ、森崎いいいい！」

「何でだあああああ！」

俺は殴られる間一髪の所で目を覚ました。

拳が寸前で止まった。

「チツ！」

なぜ今舌打ちされたのだろうか？

「よっ！森崎。」

「具合はどうだ、森崎。」

そこには、遠藤と俺を殺しかけた鉄拳先生がいた。

というよりか、今さっき二人とも俺を殺そうとしたよな。死ねって
いったもんな。

「何の事かな？森崎。」

分からないのかな？全くつくづくダメな先生だ。

「森崎、死にたいならそういえばいいんだぞ。先生はいつだって森
崎の味方だからな。」

パキ、ポキ、パキ。

なんか、すごいやばい音がしている。

仕方ないこういう時はプライドを捨てて、

ジャンピング土下座ああああ！

はっはっはっは、これこそ神の技。

「じゃ、俺は学校に行くからな。」

なぜかあの鉄拳先生はいなく、遠藤は病室をでていた。

「ふざけんなああああ！」

ちなみに、ここは病院で。

いろんな人に説教をくらったのは言うまでもない。

キーンコーンカーンコーン。

近くで鐘がなっていた。

こここの病院は俺の通っている学校に近い。

ちなみに、俺はさすがに一日安静という事で、入院しているらしい。

この時間となるともう授業は終了したのかな？

まあ、いいか。

.....。

ていうか、病室ひまつ！超暇！

仕方ない寝るか。昼寝はあんまりした事ないから寝れないと思うけ

どまあ、暇だし、いいか。

俺が寝ようとした瞬間、ドアが開いた。

そつ、そこには…

「さ……え、ちゃん？」

なぜかそこには桜 紗江がいた。

彼女は無言で頷いた。

「どつど、ど、どうしてここに？」

「その……お、お見舞い。」

どつかああああん！

頭の中で何かが大爆発を起こした。

さ、さ、ささささえちゃ、ちゃんが、お、お見舞いにつ！

待て！待つんだ俺！

こんな夢みたいいな事があるわけがない、そつ、これは夢なんだ、そつ、夢なんだ。

早く夢からさめないと。

どうすればさめるのだろうか。

そつか！

ゴンツ！ゴンツ！ゴンツ！ゴンツ！

壁に頭をぶつければきつとさめる。

「ちよつとどうしたの？だ、大丈夫？」

夢でも紗江ちゃんはやさしいなあ。

むしろ起きないで今の俺。

ちなみに、今は頭から血が落ちている状況だが、なんの問題もない。

さあ話を続けよう。

「今日はなんできたの？」

「その……お見舞いとお礼を。」

「ありがとう……お礼って俺なんかしたっけ？」

「その……屋上で助けてくれたから…そのお礼を。」

「屋上で助けた？俺がいつ？」

「その……昨日。」

昨日？昨日といえば女の子を助けようとしてでてっいたらボツコボツにされて、最後に鉄拳くらって死にそうになった昨日なのかな…。

?まさか、あの女の子が紗江ちゃん?

いやいやいや、とりあえず確認をしよう。

「その…昨日屋上にいた女の子って君?」

「……………うん。」

「本当?」

「うん。」

……………。

はああああうおおおおああああ!

という事はあのかっこいいこと言って、不良にボッコボコやられた
シーンをみられてる……!しかも好きな人にいいいい!

ヤバイ!超恥ずかしい。今すぐ死んでしまいたい。

「その……あの時は助けてくれてありがとう。」

気づいたら彼女がこちらまできていた。

「だから……………これ、お礼。」

彼女は俺の腕を掴んで俺の手のひらに小さなかわいい袋を渡した。

「あの、本当にありがとう!」

彼女はそういつて走って病室をでて行った。

俺は何も考えず布団に潜った。

というよりか何も考えたくなかった。

俺はこの日寝れない夜をすごした。

出会い（後書き）

なんか、ほとんどラブコメになってきている。作者はけっこうバトルものが好きなんです。すいません。作者はまだ初心者なので、だけど今回連休なので頑張ってたくさんかいています。出来れば作者を許してください。気分屋なので。連休終わっても頑張ってます。つもりですので、よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9004x/>

MAIN TITLE

2011年12月24日23時50分発行